

## 「開魂」

### 宮城県蔵王町・北原尾開拓～南洋パラオを忘れない

宮城県南部の刈田郡蔵王町北原尾（きたはらお）地区は、戦後に南洋群島からの引揚者が開拓した。現在、県内でも有数の酪農地帯となっている。

戦前、満州（現・中国東北部）と同様、南洋群島には多数の日本人が移住した。戦後、引き揚げ先のひとつとして、蔵王町が選定された。北海道・東北出身者のための入植地として準備され、パラオ（現・パラオ共和国）、ロタ、テニアン各島の各島から、1946（昭和21）年3月に第1陣、5月に第2陣が入植。最終的に32戸が定着した。

入植当時、地区名はなく、パラオからの入植者が多かったことから、「北のパラオ」という意味を込めて、北原尾と名付けられた。入植地は標高450mの雪深い蔵王山麓の国有林で、大木や雑木が密生し、道路は幅2m程度の1本だけだった。

入植者は厳しい自然条件の中、笹小屋を建て、手作業で開墾を進めた。48年に北原尾開拓農協を設立。焼き畑で大豆、小麦、バレイショなどを栽培したが、収量は少なかった。熱帯の気候に慣れた入植者にとって、高冷地の農業は苦難の連続だった。

53～54年、2年にわたる冷害で農作物の収穫はほとんどなかった。一方、牧草だけは生育したので、経営の主体を酪農へ転換する契機となった。67年の開拓パイロット事業の承認により、牧草地の造成を行い、乳牛の頭数が増えていった。

集落の入り口に開拓記念碑が建っている。開拓農協（72年解散）を引き継いだ北原尾農事組合が2年に建立したもので、碑銘は「開魂」。碑文には「昭和二十一年春、パラオ、ロタ、テニアンから入植する。南洋パラオを忘れないようにこの地を『北原尾』と命名する」と刻まれている。隣に、77年に北原尾支部一同が建立した慰霊碑「牛魂の碑」がある。

## ○ 蔵王町 北原尾開拓

### 開魂

（碑文）

高橋道太郎先生の尽力により  
昭和二十一年春、パラオ、  
ロタ、テニアンから入植する  
南洋パラオを忘れないように  
この地を「北原尾」と命名する。

### 開拓記念碑

平成二十三年十月一日 建立

